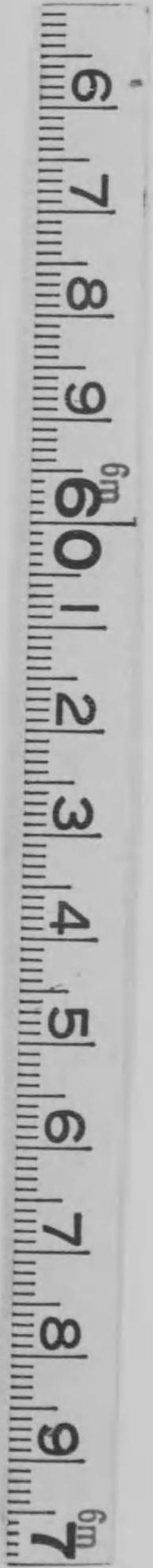


390
28

傳道叢書
第三編
日本佛教の大勢と興教大師



始



傳道叢書第三篇

日本佛教の大勢と興教大師

390-28

本書は大正八年六月本派宗務所に開設せる
 第五回傳道講習所に於ける講演の筆記なり
 茲に之を刊行し一般教化の資に供す。

豊山派宗務所教學部

日本佛教の大勢と興教大師

鷺尾順敬

今日は興教大師の、誕生の記念の日でありまして、私は此間小林さんからの御話で、其の日に來て興教大師に關する何か話をせよと云ふことでありましたが、實は私は別に自分の考を述べると云ふほどのこともないものですから御断りしましたけれども、イヤ記念の日であるから是非何か話せと云ふことでありました。それで私は御誕生の記念の日に方り自分の感想を述べると云ふやうな心持で今日參つたのであります、所が丁度講習會の期間であつて御聴きになる方は講習の爲に出てござる御有志であると云ふことを唯今承つたのであります、それで此處へ來て直ぐ何か考を變へる方が宜い

日本佛教の大勢と興教大師

正 5
 御話で
 大話で
 内交

39028

本書は大正八年六月本派宗務所に開設せる
 第五回傳道講習所に於ける講演の筆記なり
 茲に之を刊行し一般教化の資に供す。

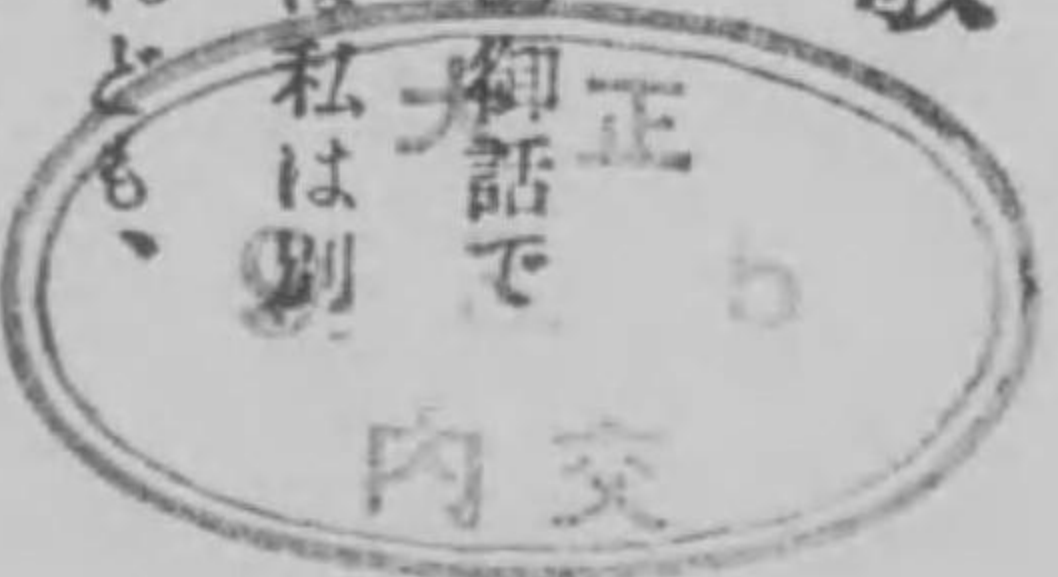
豊山派宗務所教學部

日本佛教の大勢と興教大師

鷲尾順敬

今日は興教大師の、誕生の記念の日でありまして、私は此間小林さんからの御話で、其の日に來て興教大師に關する何か話をせよと云ふことでありましたが、實は私に自分の考を述べると云ふほどのこともないものですから御断りしましたけれども、イヤ記念の日であるから是非何か話せと云ふことでありました。それで私は御誕生の記念の日に方り自分の感想を述べると云ふやうな心持で今日參つたのであります、所が丁度講習會の期間であつて御聴きになる方は講習の爲に出てござる御有志であると云ふことを唯今承つたのであります、それで此處へ來て直ぐ何か考を變へる方が宜い

日本佛教の大勢と興教大師



かもつと歴史上の事實の話をする方が宜いかとも考へて見ましたけれども、矢張り初め考へて居つたやうに自分の感想を述べやうと斯う考へましてお話する積りでありますから、一向取止めた御話にはならないかと思ひますので前以て御断りして置きます小林さんから題を出せと云ふことでありましたが自分の感想を述べることであるから題にも及ぶまいと思つて居つたのでありますけれども再び題を送れと云ふことでありますから『日本佛教の大勢と興教大師』と云ふ題を出して置きました、さう云ふ題の下で感想を述べて見やうと思ひます。

日本の歴史の研究では日本の思想の大勢を説明しやうとするにはどうしても日本の佛教の大勢を見ねばならぬと云ふことになつて居ります、今日では何人にもさう云ふことが考へられて來ました、詰り歴史上から見れば日本の思想の大勢は殆ど全く佛教に支配せられて來て居るのであると云ふまでに見られて來ました、それで日本の思想の變遷を見ると云ふことは大に必要が迫つて來てゐて日本の歴史を研究するには日本

の思想の變遷を研究すると云ふことが中心になつて來なければならぬと云ふことに考へらるゝことゝなりました、それは今日日本の歴史の研究の形勢でありまして謂ゆる國史研究の新傾向とも云ふべきものであります。

日本の歴史の研究の起つた初めは古いことでありますけれども、それが徳川時代に著しく起りました、併し明治以後その研究が更に新面目を呈して來たのであります、その一番注意すべき點は何であつたかと云ひますと、日本の歴史の經濟的方面をば研究しなければ日本の文明の變遷は判らぬと云ふことであります、昔の日本の歴史の研究は經濟的方面を閉却して居つたが經濟的方面を研究しなかつたならば日本の文明は判らぬと云ふことで、第一に日本の神社寺院の領地の問題を研究しなければならぬ、謂はゆる社領寺領を研究せねばならぬ即ち土地の變遷を研究すると云ふことをしなかつたならば經濟方面は判らぬ、それで經濟的方面が判らなかつたならば日本の文明は判らぬと云ふことが歴史の研究の眼目であつた、それで經濟方面を研究するには奈何

しても古文書に依らねばならぬ、その材料は古文書である社領寺領を研究するには古文書に依らねば方法がない、其の古文書は何處に有つて居るかと云へば東京帝國大學の史料編纂掛に蒐集せられてゐるのでその他に蒐集せられてゐる所はない、それであるから、何しても史料編纂掛に入つて研究しなければ日本の文明は判らぬ、私はこの考で史料編纂掛に入つて研究の便宜を得たいと思つたのであります。

要するに日本の歴史の研究は經濟の事實を研究することが中心である。日本の思想は經濟の事實で説明が出来るると云ふことであつたのであります。

例を云ひませうならば古來神佛の思想が結付いて神佛融合の事實がある、それが日本の文明の大きな威力であつて寧ろ日本の文明の中心事實になつて居る。所が神佛思想の結付は經濟の事實から來て居ると云ふことまでも考へられた、それは大きい寺は多く神領に建てられたもので、比叡山は大山祇命の神領であり、高野山は丹生明神の神領であつた。それであるから大きい寺が神領に建てられたことには種々理由がありま

四

せうが要するに實行し易かつたのであります、謂ゆる神人が佛教に歸依して神領を提供して大きい寺が建てられた、そこに經濟の事實から神佛融合の思想が發して居る、それが史實に認められるのであります、中古以來勤王の士が皇室の御領地から輩出したことも一面から見れば經濟の事實の關係が考へらるゝのであります。

乃で國史の研究上經濟問題の研究はさう云ふ思想問題に入つて來て居る。それが大に進んで居るのであるが今日になつては其研究が變遷して來てゐるのであります、今日の研究では經濟から思想が支配せらるゝこともあるが、然し乍ら思想の問題はもつと大きいものであるから思想問題を研究しなければならぬと云ふことになつて來てゐる。それが今日の研究の新傾向であります。

明治年間の國史の研究に佛教が重要視せられたことがある。それは佛教が經濟上の大きい問題であるからであります、寺院の領地は極めて大きい、佛教を一つの經濟的事實として注意して居つた歴史時代の佛教を解釋しなかつたならば日本の文明は判ら

ぬ、其理由は何かと云ふと佛教は大きい經濟的事實であると云ふにあつた、所が今日の新傾向は佛教は極めて大きな思想上の勢力であると云ふことに注意することになつて來た。これは著しい變遷であります、それで此の國史の研究から見て佛教の注意せらるゝ意義が變つて來た。

それで今日の國史の研究に方り最も注意せねばならぬことは外國の思想が入つて來たことであつて詰りそれが日本の思想に影響を及ぼしたことを注意せねばならぬことになつて來た、それで日本の勢力を研究しやうとするにはどうしても日本の史料だけでは充分でない、外國の史料を調査しなければならぬ、日本の思想はいつでも支那朝鮮等の思想の影響を受けてゐる其間に聯絡があるから彼等諸國の史料を調査せねばならぬことが考へられて來た、近來になつては殊に日本の歴史上の問題を解釋するには古い時代は支那朝鮮の史料、近い時代は和蘭を初め亞米利加の史料を調査せねばならぬ。それでなければ日本の文明の發達は判らぬと云ふことになつた。

それで外國の史料に注意しなければならぬと云ふことになつて佛教史の方から見れば大に面白い、奈良朝時代平安時代の文明を研究するに方つてはどうしても隋唐の文明を研究しなければ判らぬ、奈良朝時代の獨得のものとも思つたことが隋唐にあるので續々發見せらるゝことゝなつた、それから又鎌倉時代の文明を研究するに方ては宋明の文明を研究しなければならぬ、鎌倉時代室町時代の獨得のものと思つたことが宋明にあることが明らかになつて來ると云ふ風に段々關係が判つて來たのであります、それで日本の文明の研究には外國の關係を間斷なく見なければ判らぬと云ふことになつて來た、これが日本の佛教歴史の研究の上に大に面白いことゝ思はれるのであります、それ故に奈良朝時代、平安朝時代の佛教は隋唐の佛教が日本へ來て日本的に進んで來て居るのでありますから結付けて研究して見るに至つて始めて奈良朝時代、平安朝時代の佛教を解釋することが出来るのであります、それから鎌倉時代、室町時代の佛教を宋明の佛教に結付けて研究して見るに至つて始めて、鎌倉時代、室町時代の佛教

の發達を見ることが出来るのであります、それが今日吾々が取つて居ります研究の仕方であります。

八

例へば國分寺創設のことは日本特殊のものであると云ふ風に考へられてゐた所がこれは全く隋の形式であることが考へらるゝことゝなつて、隋では全國各州に大興善寺と云ふものを建て、居る、それから各州に塔を建て、居る。これは日本の國分寺に同じものであります、日本の國分寺が建てらるゝに至つたのは決して日本の創意でないことが考へらるゝのであります、それは私は前から考へて居つたことで支那の佛教史籍にはさう云ふことが見えます、併しながら隋書などにさう云ふやうなことは見えませぬ、それで歴史家には特に注意せられなかつたのであります。

所が最近に史料の編纂主任である田中博士が昨年暮より今年初めに掛けて支那に旅行し日本の國史研究の史料を採訪せられたのであります、これは最初の試みであります、幾多の史料を採集して歸られました、それはどう云ふものであるかと云ひ

ますと碑文であります、諸方の碑文拓本を採集して還られました、支那では碑文を重寶にして居りますが唯筆蹟の上から見て居りましてその書風を研究せられてゐても歴史の材料としては使用せられて居りませぬ、それであるから古い石碑でも筆蹟の拙いものは一向に顧みるものもなく廣告の紙を貼る臺に使はれて居ります、往々にして破壊して建築の材料に使用せられて居るものもあります、それを田中博士は歴史の材料として取扱つて採集せられたのであります、支那人が碑文を重寶にする意義とは全く別な意義であります、さう云ふことで支那の碑文は日本の文書記録と同じものと見らるゝのであります、田中博士の發見して持ち歸られたものに隋の碑で仁壽二年に隋帝が支那各州に塔を建て、舍利を納めたことが石碑に刻せられてある。其の石碑を發見して拓本を持つて還つて來られた、さう云ふ材料と云ふものは今日迄は注意せられなかつた、其石碑は隋時代のものであつて久しく土中に埋められて物の下敷になつて居たそれを摺つて來られたのであります、是れに依つて隋に國分寺を建立して居ることが

明白になり佛教史籍に見える所をピシツと證明することになりました、それで日本の奈良朝時代の國分寺は全く隋の形式を取つたものであることが明白になる。そこで隋が各州に寺塔を起したことが、日本が國分寺を起したことが何れだけの相違の點があるかと云ふことが問題になつて来る。日本の國家的佛教と云ふ事が日本の獨特のものとは云へないのであります、日本の佛教は聖德太子の時から國家的佛教の意義があるがそれは由つて来る所がある、隋唐に國家的佛教が盛んに起つたのであります隋も唐も外國の壓迫を受けて居る、それであるから佛教に依つて國家の平安を祈禱せられたものである、それが日本に傳はつて奈良朝時代の國家的佛教、平安朝時代の國家的佛教となつたそれが日本獨特の者ではない隋唐の形式が輸入せられたものである、それで隋唐にはあの時代に國家的佛教の必要があつたけれども日本では外國の壓迫と云ふものを受けないからその必要が迫つてゐると云ふでもない、それにも係らず傳教大師弘法大師等は鎮護國家を盛説せられて居る平安朝時代の初、國家の政治上の動搖があつ

たことが鎮護國家の盛説せらるゝ理由とも見らるゝのであるが、實は隋唐の形式が輸入せられたものである、それで國家的佛教と云ふものが特徴であると云つて居るけれども私はさう認めないそれは奈良朝時代、平安朝時代の政治社會等の經營は隋唐より由來して居るものが多い、寧ろ摸倣的の意義が見らるゝのである、日本的に轉化せられて居るものもあるけれども或る方面より見れば摸倣的の意義が見らるゝと云ふことを領承しなければならぬ、それで容易に日本の佛教の特徴など、云つて自ら誇られないことゝなつて居る。

それから又鎌倉時代には宋の思想が日本へ入つて來て居る、宋が南に追はれまして南宋と云ふものになり國運が塞迫し國民の間に勤王報國の思想が勃起してゐる、佛教家が極力勤王報國の思想を鼓吹してゐる、大慧宗杲が徑山の萬壽寺の住持になつた時に上堂し滿堂の雲衲に對して法問を提唱して宰相秦檜の金に和しやうとするを罵詈したことが聞えてゐる、南宋の勤王報國の思想が日本へ入つて來て居る、蒙古襲來の時

に勤王報國の思想が日本の佛教界に勃興して來てゐるが、その思想は奈何しても南宋から入つて來て居るものがある、南宋から禪僧が渡來してゐる大に教化してゐることも考へられねばならぬ、確かに南宋佛教家の思想を受けて居る。

それから又南北朝時代に勤王報國の思想が盛に起つた所がそれを一面から研究して見ると南宋の學問宗教等の影響は尠くない、禪僧が彼の學問宗教を傳持して一世を教化したることから考へられねばならぬ、世間の歴史家は禪僧などは勤王報國の思想に關係ないかの如く考へて居る、五山の禪僧などは勤王報國の思想に背いて居る所があると云はれて居ます、然かるに段々事實を調査して見ると室町時代の禪僧の詩文にその思想の發揚せられてゐるものが尠くない。それは日本の思想史上注意すべきことでもあります、如何しても南宋の思想の影響を受けて一緒に發揚して居るものであると解釋せざるを得ぬことになつてゐる、斯の如くに支那の事實思想に聯絡して觀察し、日本人の變遷か研究せられる事となつて來た、従つて日本佛教の眞面目も顯はるゝこ

とになつて來ました、これが最近の研究の傾向であります、斯の如くにして日本佛教の大勢を見ると如何しても國家鎮護の佛教と個人修養の佛教と二つの思想が並んで來て居るやうに見られます、佛教傳來の初めから漸くこの二つの思想がある、佛教が護國の主意で起つたことは事實であるが決してこの一方ばかりで起つたものとは云へないので、國家鎮護の佛教と個人修養の佛教と二つ並んで來て居る、それで日本佛教の大勢上よりこの形勢を見やうと思ひます。

それで今お話し申したやうに國家鎮護の佛教が日本佛教の特徴だと云ふことに就て私は異議を挟みたいのであります、是は奈良朝時代にも平安朝時代鎌倉時代にも貫いて來て居る所の事實であるが、この思想はつねに支那の思想と結び付いて居るところがある、如何しても日本佛教の特徴であると誇るべきものでない、この思想が日本へ來て一段の新勢力をなして居る。支那の國家鎮護の佛教が日本へ來てから摸倣の事實となつて居るものでなく、それが一段の新勢力となり日本國家の發達を助けて居る事

實のあることは無論である。けれどもそれをば唯一なる日本佛教の名譽として誇ると云ふことはどんなものか考へたいのであります。從來傳教大師、弘法大師の國家鎮護の佛教と云ふものが、日本佛教の一大功業であると見られて居るけれども、其を考へ直して見る必要はなからうかと云ふことに就て、新らしく考へて見たいと思ふのであります。今日は日本の佛教が國家鎮護の意義を發揮しなければならぬと云ふことが盛んに説かれて居りますが、一方では其に對して哲學的考察を下してゐる者もあります。先日或人が洋行せられる前に語つたことがあるが、その人は日本佛教に特色づけるのは好いが、國家的佛教を盛説するのは、今日の時節柄一種の保護色をつけるものでないかと云ふてゐた、この間私の友人某君と二人でこの事を話しましたことであるが、私の友人某君は面白い人で今日の佛教家は鶏の喧嘩見たやうにコツカ／＼と云つてゐるではないかと大笑しました。日本の佛教には國家鎮護の佛教と個人修養の佛教とがいつでも並んで居る、傳教大師、弘法大師の國家鎮護の佛教と、傳教大師弘法大師の

個人修養の佛教と二つを並べて見る必要がある。國家鎮護の佛教ばかり見て個人修養の佛教を見ないやうなことがあつてはならぬ、その一方を誇つてゐることは宜しいがそれと同時に個人修養の佛教を誇るべきである、傳教大師、弘法大師の個人修養の佛教は大に誇るべきものである之を棄てゝはならぬ、寧ろ佛教の生命はこの方にあるのではないかとも思はるゝのである、例へば弘法大師の佛教を見ても國家鎮護の佛教よりも個人修養の佛教の方が大師の内的生活である、その方が尊いではないかと云ひたいのであります、今日やゝもすれば此の方を無視せんとするは大に誤つた偏見であらうかと思ひます。

奈良朝、平安朝、鎌倉の各時代に亘つて、個人修養の佛教の形勢を観察すれば、固より變遷があるが主に來世教になつて居る、來世教と云ふは即ち淨土往生の思想である。奈良朝時代にもう淨土往生の思想が盛んに行はれて居る、是迄奈良朝時代は現世利益の佛教の時代であると云はれてゐた、それは左様であるけれども奈良朝時代に來

世得脱即ち浄土往生の思想が盛んに行はれて居ることが明瞭に認めらるゝのである。奈良朝時代の浄土往生の思想は奈何云ふものかと云ふと、現世來世を一貫してゐる思想がある、其は即ち生命恒存の思想である、浄土往生と云ふことは一面から云へば死んでも死なぬと云ふ思想である。奈良朝時代の浄土往生の思想と云ふものは生命恒存の思想で、それが偉大なる精神力となつて居る。東大寺の大佛造立でも所謂現世利益の思想で企てられたものでない、現世來世一貫の思想から企てられたものである、即ち生命恒存の思想である。奈良朝時代の個人修養の佛教がさう云ふ風に現れて居る。それから平安朝時代に入つてさう云ふ意義がある。浄土往生とは現世の幸福を來世に續けたいと云ふことである。平安朝時代の中頃以後浄土教は盛に起ることゝなつた佛教史の事實を見れば當時の大寺には概ね浄土教の修行道場があつて念佛堂とか浄土院とか聖衆來迎院とか名づけられてゐる。之は大寺に附屬して居るもので、所謂修道院であつて一部の道俗が世間から離れて専念修行してゐた、是が即ち個人修養の佛教であつた。

平安朝時代の中頃から浄土往生の思想が漸く變遷して居る、それには種々の理由がありますが、社會の狀態が大きな刺撃を與へたものと思ひます、平安朝時代の中頃になり現世の幸福を認めず寧ろ現世を破壊して來世を建立しやうと云ふ思想が起つた居るのである、つまり此世は、つまらぬ穢土である。であるからして立派な浄土に往生しやうと云ふ思想になつて居る、天台宗の源真僧都の往生要集に厭離穢土欣求浄土を盛説してゐる、それは浄土教の教義であるからして突然平安朝時代の中頃から出たのではありませぬ、然し乍ら今は佛教の教義から云ふのでなくして社會の思想から見るのであります、所謂思想史の上から見て論ずるのであります、さうすると往生要集に厭離穢土欣求浄土を盛説してゐるが、その思想は決して此の書に依つて盛行したものと見られない、その思想が京都を中心として起つてゐるのは京都の社會的事情が促したものと見らるゝのであります。

世得脱即ち浄土往生の思想が盛んに行はれて居ることが明瞭に認めらるゝのである。奈良朝時代の浄土往生の思想は奈何云ふものかと云ふと、現世來世を一貫してゐる思想がある、其は即ち生命恒存の思想である、浄土往生と云ふことは一面から云へば死んでも死なぬと云ふ思想である。奈良朝時代の浄土往生の思想と云ふものは生命恒存の思想で、それが偉大なる精神力となつて居る。東大寺の大佛造立でも所謂現世利益の思想で企てられたものでない、現世來世一貫の思想から企てられたものである、即ち生命恒存の思想である。奈良朝時代の個人修養の佛教がさう云ふ風に現れて居る。それから平安朝時代に入つてさう云ふ意義がある。浄土往生とは現世の幸福を來世に續けたいと云ふことである。平安朝時代の中頃以後浄土教は盛に起ることゝなつた佛教史の事實を見れば當時の大寺には概ね浄土教の修行道場があつて念佛堂とか浄土院とか聖衆來迎院とか名づけられてゐる。之は大寺に附屬して居るもので、所謂修道院であつて一部の道俗が世間から離れて専念修行してゐた、是が即ち個人修養の佛教であつた。

平安朝時代の中頃から浄土往生の思想が漸く變遷して居る、それには種々の理由がありますが、社會の状態が大きな刺撃を與へたものと思ひます、平安朝時代の中頃になり現世の幸福を認めず寧ろ現世を破壊して來世を建立しやうと云ふ思想が起つた居るのである、つまり此世は、つまらぬ穢土である。であるからして立派な浄土に往生しやうと云ふ思想になつて居る、天台宗の源眞僧都の往生要集に厭離穢土欣求浄土を盛説してゐる、それは浄土教の教義であるからして突然平安朝時代の中頃から出たのではありませぬ、然し乍ら今は佛教の教義から云ふのでなくして社會の思想から見るのであります、所謂思想史の上から見て論ずるのであります、さうすると往生要集に厭離穢土欣求浄土を盛説してゐるが、その思想は決して此の書に依つて盛行したものとは見られない、その思想が京都を中心として起つてゐるのは京都の社會的事情が促したものと見らるゝのであります。

そこで矢張り前に戻つて經濟方面を話さねばならぬ、當時公卿は地方に莊園を有つてゐて、その莊園の收穫で生活して居つた、所がその地方の莊園は皆地方人に荒らされて京都に年貢が入つて來ない、公卿は地方に番人を送つて莊園の番をさせた、然るにその番人がまた地方で公卿に反對するやうになつた、番人は武器を有つて居る京都の公卿は武器を有つて居らぬ公卿の方では歌を詠んだり笛を吹いたりして居り番人の方は馬を練つたり刀を磨いたりして盜賊を防いで居たが土地の權力を奪ふこととなり京都の公卿の方へ収入が來ない、そこで京都の公卿は乾物となることになつた京都から送つた番人が後の武士であります鎌倉時代の武士であります。京都の公卿は自分が地方に送つた番人のためにその領地を奪はれたそれが公卿と武家との交代期である。遂に實際の權力は武家に取られて公卿の生活機關が破れた、そこで京都の方では人生を悲觀し所謂厭離穢土欣求淨土の思想が起らねばならぬことで、之が即ち淨土教の變遷を促したものと見ねばならぬ。

斯の如く經濟上から思想の形勢を論定することは、今日に至つては多少の非難を受けるのでありますが實際はさう云ふ事實を認められます。

淨土教が變遷して現世を破壊して來世を建立することになり此の世はつまらぬ一切の欲望は來世で達するのであると云ふことになつて來た。そしてその淨土教と云ふものが盛んになつた、平安朝時代の中期以後の淨土教はそれであり、その淨土教が盛んになつた際、その思想をば纏めて一方の大勢力を成したのが、法然上人であります。奈良朝時代平安朝時代の淨土教は阿彌陀佛の淨土に限つたものでない、彌勒の淨土もあり觀音の淨土もあるけれども、それを阿彌陀佛の淨土に限つて淨土教を主張したのが法然上人である、思想から云ふと奈良朝時代から發達して來てゐる個人修養の佛教を整理して一宗門を建立したと見らるゝのであります、所がその淨土往生の思想が絶頂に到つて弊害があつた、現世を破壊して來世を建立することとなり、現世の破壊は現實であつて、來世を建立することは理想であるから、弊害が生ずるのである、

その熱烈なる信者は自殺するに至つた、即ち琵琶湖に投じて水死した者がある、此の世を厭離して、彼の世を欣求する思想を徹底すれば自殺となる、此の世は穢土であるから厭離する彼の世は淨土であるから欣求する自殺するに至らずとも隱遁して社會から脱離することゝなる天皇が熊野へ御參詣になつて居られる間に宮中の女官等が尼さんになつた、天皇が御歸りになつて見ると女官が頭を剃つて尼さんになつて念佛を唱へて居つたので大騒動が起つた事もあります、現世を厭ひ來世を願ふ思想であるから弊害がある、法然上人はその弊害を救ふことに就て奈何に説かれたかは、認められな

い、それを極力攻撃したのが日蓮上人であります、その弊害を救はうとしてゐるのが親鸞上人であります、親鸞上人は京都を離れて東國に來て武士の勃興を目撃して居るから必ず感發せられたことがあつたでありませう、之が日本の奈良朝時代から發達して來てゐる個人修養の佛教の變遷であります。

そこで興教大師の立場を見やうと云ふのであります大師は平安朝時代の末から鎌倉時代の初めに亘つて出られた、諸君の御考に合ふか合はぬか知れぬが、私から見ると興教大師の佛教は個人修養の方面に立つて居る、その方面に強大なる偉力で立つて見らるゝのであります。

鎌倉時代に國家鎮護の佛教は天台宗と云ひ真言宗と云ひ弊害があつたが、新らしく入つて來た禪宗があつた、その間に於て興教大師の佛教は個人修養の佛教で立つて居る。今話したやうに當時個人修養の佛教は來世教で淨土往生の思想である、その思想は現世を破壊して來世を建立しやうと云ふので弊害に陥つて居る、さうして親鸞聖人と日蓮聖人は共にその弊害を認めて、そこで鎌倉時代の佛教の個人修養の佛教の發達は成り、鎌倉時代は國民自覺の時代である、鎌倉時代ほど日本國民が自覺した時代は過去になかつた、その自覺的意義が即鎌倉時代の佛教の特徴である。然るに法然聖人の個人修養の佛教の内容が來世教であつて、その思想に破綻があつた、鎌倉時代の淨土教は一面に今話したやうに弊害があつた、所が興教教師の個人修養の佛教は勿論淨

土教ではない、歴史から見れば如何しても個人修養の佛教は浄土教である、浄土往生の思想がその全部を覆ふて來てゐる、所が興教大師は浄土教の主張者ではない、浄土教の弊害を認めて極力攻撃した者は日蓮聖人であるが興教大師は日蓮聖人のやうに浄土教を攻撃しなかつた寧ろ浄土教を容認して居る、興教大師の著述の孝養集に浄土教を勸説して居らるゝのである。興教大師は日蓮聖人のやうに浄土教を攻撃せられたものでない浄土教を容認して居る、然し乍ら浄土教の主張者ではない、固より真言宗の教理より見て現世とか來世とか云ふやうに分別すべきでない、興教大師は到る所にこの意義を説いて居られる、即ち生界、佛界の差別を執すべきものでない、生界佛界の平等を觀すべきである、父母の生める所のこの肉身は即ち理智であると云ふやうなるお言葉があつたやうに思ふ、それは諸君がよく御存知のことで私が云ふまでもない真言宗の教義の上からさうでなければならぬ、實は大乘佛教の大原理の上から左様でなければならぬ、興教大師はこの所謂自覺的佛教を主張して居る之が大師の立場であるさうしてこれが興教大師誕生の意義であると思ふ。

興教大師の一代の經歷の上に國家的佛教を主張せられたことがあつたかどうか私はよく知らぬ、私の見る興教大師は、個人修養の佛教即ち自覺的佛教の意義に立つて居らるゝ、初め修學の時代即ち京都地方で學問をせられた時代、それから高野山の時代、根來の時代を通じて皆自覺的佛教の意義で立つて居らるゝと見られるのである。

それは日本佛教の大勢から見れば鎌倉時代の佛教の上に一つの立場が明瞭に認められる、鎌倉時代の新佛教として禪宗がある、禪宗には南宋の思想が傳はつて來て國家的佛教即ち國家鎮護の意義で佛教が或る勢力を持して居る、禪宗と云ふても此意義を重に傳へて居るのは臨濟で、曹洞の道元禪師は個人修養の意義で立つて居る、それで京都でその佛教を主張しないで越前に隠れて修養すると云ふことで山中に立籠つて居られた、それで此の日本の佛教史の半面は常に個人修養の佛教である。日本の佛教の上に國家鎮護の佛教と個人修養の佛教とある、其の個人修養の佛教が浄土教で覆はれて

ある時、その浄土教が弊害を生じて居る時、興教大師は個人修養の佛教を以て立つた、そして其は浄土教でない眞言宗の教義を以て立つたのである、これが興教大師の本領であると云ひたい。

それで弘法大師の個人修養の佛教を興隆せられたもので、弘法大師の内の生活を發揮せられたものと云ひたい、私はこゝに大師の本領を認めたい。私のこの考が當つて居るか居らないか、其歴史上の見解が誤つて居るか居らないかと云ふことは、諸君の御判断を願ひ御意見も承りたい、私はかう云ふ見解に依り興教大師の誕生を大に意義あるものと見やうと思ふ。

當時浄土教を駁した者は頗る多い、一代の大徳たる明恵上人も之を駁して居る、解脱上人も駁して居る、明恵上人と云ひ解脱上人と云ひ大徳で大學匠であつて、大に駁して居る。法然上人の多數の門下の言行には弾斥せらるべき事實があつた、浄土教は教理の上でなく實際の上に非難さるべき事實があつた、所が興教大師は其浄土教を駁

して居らぬ、寧ろ容れて居る。而して浄土教を容れて居らながら現世來世の二つを見るべきものでないと云はれてゐる所に深奥なる意義があると思ふ。茲に其の立場が明瞭に認められると思ふのであります。

それから興教大師の門下に於ては此個人修養の意義が教理の研究に進んで往つたと思ひます、個人修養の佛教は眞言の教理の方の問題に進んで益々それが哲學的の深い研究となり頼瑜僧正等が出られて愈々新面目を呈することゝなつたものと思ひます、興教大師の個人修養の佛教の意義が一步進んで往けば教理の研究にならねばならぬのであるからして謂ゆる教相が起つて来る、その哲學的の深い研究は日本思想史の上から注意すべきものである。

けれども江戸時代になつて、一種の壓迫から佛教全體が國家的佛教になつて居る。それは幕府に利用せられたと云へば、さう云はるが、實は當時已むを得ない形勢であつたのである、それであるから、江戸時代から興教大師の門下に於ても自ら形勢が變

つて居る。

一面より見れば興教大師の後系者が根柢に居つて學問修養を中心にした個人的佛教が弊害を生じて來た、詰り大傳法院の一教團が個人修養の意義であつただけ、根柢山が災禍を招く一つの理由になつたかも知れない、所が江戸時代になつて形勢は一變した幕府の保護に依つて智豊兩山が興つたのであることは云ふまでもない。

江戸時代の佛教は國家鎮護の佛教とも云ふべきものである、併しそれは寧ろ淺薄の意義に於て幕府に使れた、各宗の僧侶は悉く幕府の命を受けて宗門改めの役人に使はれるやうになつた、即ち宗教上の意義が無くなつて政治上の機關になつたやうなものであります、其本は幕府が國家鎮護の佛教を作つたのであります、其の江戸時代の佛教が繁榮することゝなつて却つて衰敗の兆を見ることゝなつた、つまり幕府に使はれて勢力を得たことが禍因をなして幕府時代の末に國民の反感を買ひ大に排斥せらるゝことになつた、幕府の佛教になつたから幕府が排斥さるゝと同時に亦佛教も排斥せ

らるゝことになつた、國家的佛教が幕府の政治に結付いてゐたものであつた、それが打壞はされた、而して明治維新以後に佛教が興つたとすれば謂はゆる個人修養の佛教で興つたのである、それで若し個人的修養の佛教がなかつたならば日本の佛教は昔に潰れて居る。乃で佛教の生命は個人修養の意義にあることは事實に依つて證明されます。

今日、日本の佛教は國家的意義を發揮しなければならぬ、國家の政治を援助して活動せなければならぬと云はれて居る、そこで天台、眞言等が自ら大に誇るべきことゝせられてゐる、併しそれは一方には亦大に考ふべきことであつて、日本の佛教ので興たのはそれであるが。日本の佛教の衰えたのも亦それである、幕府の佛教がそれで興つてそれで倒れたのである。それで今日佛教が存在して居るのは何の力であるかと云へば個人修養の佛教の意義である。それで立つて來て居るのである。佛教は宗教である宗教の意義は何であるかと云へば個人の自覺である。一人々々の自覺を要するのつ

あるそれが宗教の意義である佛教の本領である。無論國家を忘れ社會を棄てゝはならない、併ながら個人の自覺が主眼であり根本でなければならぬ、自分は佛陀である即ち覺者であると云ふ所に達したならばそれがどうして國家を無視し社會を棄却するものですか、佛教者の一番大切なことは自分は佛陀である即ち覺者であると云ふ所に到達することである、自分は佛陀である覺者であると云ふ所に到達したならばそれが國家を無視したり社會を棄却したりすべきものでない、こゝに至つて個人修養の佛教即ち國家鎮護の佛教である。全然一つになるのである。

獨逸は極力國家主義を主張したのであるが其獨逸の國家は却つて破壊せられて極力個人主義を主張したやうに思はれた亞米利加が今日起つて世界の一大雄者になつて來て居る、どうしても國家の發達は國民各個の自覺に依らねばならぬ、即ち個人の自覺である。日本の佛教者がそれを無視することになつたならば、佛教は倒れると同時に個人が起つて個人が弱く國家が強い譯はない、佛教の目的は一人々々が佛陀になる

即ち覺者になるのであるそれが佛教の本領でなくてはならぬ、今日國家鎮護の佛教を盛説して個人修養の佛教を失念することゝなつては畢竟國家鎮護の目的も成立たぬ。

古來日本の佛教には兩方面が見らるゝのである、其兩方面は缺くべからざるものであるけれども佛教の歴史から見ると國家的佛教で興つて居るが國家的佛教で衰へて居るそれは印度で超日王の時、國民的運動が起つて國家的佛教に反抗した、支那でも唐の武帝、周の武帝の時に國民的運動が起つて國家的佛教に反抗した。朝鮮でも同様の事實があつた徳川時代の佛教でもさうであります幕府の佛教となつた。それに反して明治維新の時國民的運動が起つた、佛教の歴史が證明する所に依れば、佛教の生命は個人修養の佛教にある、これは今日興教大師の誕生日に特に考ふべきことではないかと思ふのであります。

要するに興教大師の日本佛教史上の黄金時代たる鎌倉時代に立つて居らるゝ位地は個人修養の佛教を發揮して居らるゝ所にある、その御一生の經歷は個人修養の佛教の

表現であると思ふ。それが今日に於て大に意義あるやうに思ふのであります。感想を述べて見たいと思つて御話した次第であります。極秩序が立ちませぬでお聞き苦しいございましたらうこれで失禮いたします。(終)

日本佛教の大勢と興教大師終

大正九年二月廿六日印刷
大正九年三月五日發行

定價貳拾錢

編輯人
發行人
印刷人
印刷所
發行所

東京市小石川區大塚下町十七番地
豐山派宗務所教學部
右代達者 湯澤龍岳
東京市小石川區大塚下町十七番地
市橋本賢
東京市神田區須賀町一丁目
安田徳治郎
東京市神田區須賀町一丁目
健徳堂印刷所
東京市小石川區大塚下町十七番地
新 興 社
電話東京四五八〇三番

表現であると思ふ。それが今日に於て大に意義あるやうに思ふのでありますさう云ふ感想を述べて見たいと思つて御話した次第であります。極秩序が立ちませぬでお聞き苦しいございましたらうこれで失禮いたします。(終)

日本佛教の大勢と興教大師終

大正九年二月廿六日印刷
大正九年三月五日發行

定價貳拾錢

編輯人
發行人
印刷人
印刷所
發行所

東京市小石川區大塚坂下町十七番地
豐山派宗務所敎學部
右代表者 湯澤龍岳
東京市小石川區大塚坂下町十七番地
市橋本賢
東京市神田區表神保町一―番地
安田徳治郎
東京市神田區表神保町一―番地
健捷堂印刷所
東京市小石川區大塚坂下町十七番地
新興社
振替東京四五八〇三番

390
28

終

